みのむかし話

その8

伊予神社のむかし話

伊予神社のお松狸（まつだぬき）

昔、吉津の伊予神社の東の隅に太い楠の木がありました。その幹に大きな穴が開（あ）いており、そこにお松狸という赤い顔の狸が住んでいました。このお松狸、悪賢く、人を化かすのがなかなかうまかったそうです。

ある日の夕方、お松狸は神社のすぐ北の札ノ辻の土手まで行ったとき、人に出逢ったので、黒いかたまりになって道にうずくまっていました。そうとは知らない下高瀬のうどん屋のお婆さんは、その黒いものを何気なくまたいで通りました。ところがその夜中に、表の戸をたたく音がするので、「はいはい」とお婆さんが出て行くと、あしたの朝までにうどんを百人前作ってくれとのことでした。どこのだれかとは確かめませんでしたが、うどん屋は家内総出（かないそうで）でうどんを打ち出しました。朝までという注文なので、夜（よ）どおし眠らずにうどんを打ちました。

やっと注文どおりのうどんを打ち上げたのは、夜（よ）も白々（しらじら）と明けてから。「ああ、やっと間（ちゅうもんぬし）に合った」とお婆さんは大きく背伸びをしました。注文主がもう来る筈（はず）だとお婆さんは待っていましたが、いっこうに受け取りにきません。昼になっても、*よわざになっても現れませんでした。とうとうたくさんのうどんを腐らせてしまい、大きな損をしてしまいました。これは、お松狸がお婆さんにまたがれたのを恨みに思い、こんな仕返しをしたのでしょうか・・・

また、あるところに、良縁がなく婚期を過ぎようとしていた娘さんがおりました。ある時、縁談があり、とんとん拍子に話が進み、丸亀へ嫁入りすることになりました。結婚式のお祝いははずみ、お客さんたちは酔いつぶれて寝こんでしまいました。

翌朝、夜が明けはじめて驚いたことに、土器川の河原で全員寝ているではありませんか。花嫁は、石の上へぽつんと一人で座っていました。もちろん花婿の姿は見えません。朝露が、きらきらと河原の草を輝かせていました。

花嫁は、しくしく泣きながら石の上から降りてきて、そして、恥ずかしそうに村から出て行ってしまいました。これは丸亀城の狸とお松狸が示し合わせた念の入った悪戯（いたずら）だったのです。

また、ある時、津の前の若者が三人、伊予神社へ草刈りに出かけました。鬼茅（おにかや）を刈っていると、茅のなかで狸が寝ているではありませんか。そーっと近づいて様子をみてみると、よほどよく眠っているとみえ、若者たちが近づいても起きてきません。若者たちは、目で合図しあって狸を捕まえしばりあげ、生け捕りにしました。その狸がお松狸だったのです。

*「よわざ」は、夕方のこと

お松狸イラスト:三野津中学校生徒考案

参考文献:三野町誌（昭和五五年発行）一〇三一P